

## 第4章

# 成果報告

### コース別発表会

平成29年2月27日、プログラムの成果、非営利団体の運営、各分野の活動についてとりまとめた内容を、分野ごとに発表した。

## I. 高齢者関連分野（鳥取県）

### 1. 鳥取県の支援体制

健康サービス拡充の必要がさらに求められることに伴い、日本では相互支援が注目されている。私たちはボランティアでケアカウンセラーが地域の独居高齢者の家を訪問する見守り支援の取組について学んだ。ただ訪問するだけでなく、電球の交換など簡単な作業も手伝っている。鳥取県では、県内のケアカウンセラーを増やし、相互支援の拡充を模索している。

### 2. 私たちは何を学んだか

相互支援や地域の支援が重要であることを学んだ。特に、大きな都市における基盤がしっかりしている地域作りが要になることを学んだ。そして、高齢者に前向きにアプローチすることの重要性を知り、そうすることが、高齢者が仕事をし、地域に関わり続けられる新しい方法を見出すことに繋がることを知った。対象者を中心に据え、そしてその家族も選択や決断に巻き込みながら行われるケアも非常に重要である。個人が自分の興味を実現し、その機会を逃すことがないよう、常に活動的であることの重要性を、私たちは学んだ。

### 3. 私たちは何を共有したか

- ・ 終末ケア: 私たちは、タブー視されている「死」について、本人がどのように望んでいるのかを家族が理解するためにも、早い段階で話し合うことに取り組むべきである。
- ・ 私たちの活動が人々の精神の健康にどう貢献しているのか可視化する: 動画やソーシャルメディアを活用し、活動の利点を紹介する必要がある。
- ・ 資金調達: ヨーロッパ諸国と文化が異なるが、「ファンドレイジング」という発想は有効だと考える。寄付行為(ボランティア)に対する意識、それを日常化するための意識改革はどのようにしたら実現できるのか。具体的な取り組みや実際に活動を通して人生が変わった人など声を届けることで、社会や政府から資金を調達することが可能になるかもしれない。
- ・ どのようにボランティアを募集するのか: ボランティア活動には必ずプラスがあるように設定する(研修、

認定書、表彰)。「学生」が経験を得ることができるようにする。さらには、企業のボランティア活動がより促進され、営利セクターによる社会貢献が活発化する。ソーシャルメディアや口コミを有効活用して時間と資源の必要性を訴える。

- ・ 他の団体とのミーティングを定期的で開催することの意義: サービスがどのように運営されているのかを常に知っておくことは、サービス利用者をより良く支援することにつながり、また連携して資金調達をしたり包括的に地域に貢献することにつながる。

## II. 障害者関連分野（大分県）

### 1. 私たちは何を学んだか

ピアサポートのもたらす効果が日本ではいかに卓越しているのか、ということを各団体訪問にて受けた説明を通して知ることができた。(大分自閉症協会、ダウン症連絡協議会、大分市保健所中央保健センター、社会福祉法人とんとんこども発達支援センターもも・いちご保育園、NPO法人おおいた子どもネット放課後等デイサービスなないろ) いずれの団体も異なる団体や事業者と強固な連携を展開していた。今後、より教育と福祉の領域における融合と協働が実現されると良いと感じた。

### 2. 私たちは何を共有したか

NPOロビー活動で重要な役割を果たすものであり、日本のNPO団体はもっと認知度を向上させるべきである。インクルージョンの方針に関しては、フィンランドはインクルージョン教育の事例について紹介し、ドイツはパーソナルシステムについて、英国は個人のニーズについて紹介を行った。意識啓発の、重要性は全ての国において広く認知されていた。

### 3. NPO団体の活動に対するフィードバック

- ・ より多くの提言を: NPOはより良い政策に向けて声を挙げなければいけない。障がい者当事者が、一番求められているニーズを理解しているので、一番効果的に声を代弁できることから、もっと多くの当事者がリーダーシップを発揮することが必要である。

- ・ 広報活動: より多くのロールモデルを輩出することが、障がいに対する前向きなイメージを創出することに繋がる。当事者の権利の認知度向上(自己決定)は、当事者がリーダーシップを発揮することを後押しする。一人の人が取り組めば良い、というものではない。NPO全体として、組織全体として、団体の認知度を地域の中で、メディアの中で、向上させる必要がある。
- ・ 連携: NPOと公共サービスが連携することで、より包括的なサービスを提供できる。NPOは公共サービスの提供の際に、よりサービスを強固なものにする役割を果たす。
- ・ 溝を埋める: 異なる団体が協同することで、相互にサービスの溝を埋めることがより容易にできる。例えば、私たちが訪問した放課後等デイサービスなどでは、地域の学校と連携してとても効果的な予防活動を展開していた。この取組は、教育と福祉の境界線を越えた活動でもあった。

### III. 青少年関連分野 (鹿児島県)

#### 1. 私たちは何を学んだか

故郷(日本語で「故郷の町」を意味する)、郷中教育(伝統的な、学校以外で行われる自治会内の教育)に焦点を当てていた。特に、地域に根付く民話の語り部の活動は地域再発見に役立つ。訪問団体の一つである「艸舎」のモットーがとても印象的だった;地域で学び、地域から学び、地域の一員になる。

#### 2. 私たちは何を共有したか

自分たちの活動が社会にどのような影響をもたらしているか評価することの重要性、すなわち観察すること、評価すること、KPI(主要業績評価指標)を設定することの重要性を共有した。NPOでは、組織管理と戦略を立てることが非常に重要になってくる。そして、最も重要なことは、若者の声に耳を傾けることである。

#### 3. NPOマネジメントについてのフィードバックと提案

NPO運営における戦略的思考が欠けている。活動は行われているが、それらを将来どう活かしたいのか将来の戦略が見えない。また、統括組織が効果的に機能していない。ネットワークはもっと密な関係であるべきである。若者がもっとボランティア活動に参加するようモチベーションを高める取組を行うべきである。

NPOにおけるより良いマネジメントの実現のためには、明確なビジョン、ミッションそして希望を持つことである。団体を組織化することが成功の鍵となる:誰が何をするのか、なぜするのか、伴う責任は何なのか、団体を管理する上で若者をどの位置に据えるの。NPO間のネットワークはとても有効である。

#### 4. ネットワークの活用案

国内では、ネットワーク構築のための定期的なミーティングを行う。国(年代)を超えたプロジェクトも非常にメリットが期待できる:具体的には、国を超えた資金調達の可能性を探ること、様々な人とつながることができる共通のプラットフォームを創ることである。このネットワークを活用して、政府との新たな対話を可能にすることもできる。

最も重要なことは、全ての参加者が自国の政府に対し今回の経験を語り、事業の継続に向けて働きかけることである。その一助となるために、IYEOも、連絡先一覧を作成したり、プロジェクトの最新情報/各国の最新情報が掲載された月例ニュースレターの発行するなど、支援ができるかもしれない。

### IV. 田中智也内閣府青年国際交流担当室国際企画担当参事官補佐からのコメント

参加青年の発表を聞いて、3県での地方プログラムがとても充実したものだったと感じた。それぞれの参加青年が、様々なNPOが地域で直面する課題についての具体的な事例を知り、また現場に携わる人々と話ができただことは非常に有意義だったと思う。皆さんの学びや発表を日本の関係者にフィードバックして、各組織で活用できるように努力する。また、参加青年の皆さんも、日本での学びや発見、日本の事例をとおして母国をかえりみて再発見したことを今後の活動にいかしてほしい。

今回の発表を受けて、全分野に共通していることについてコメントを述べたい。まず、サービスの利用者、当事者のニーズを把握すること。そして、当事者の意見を尊重し、当事者を中心に物事を考えること、最後に、各組織間で連携して成功事例を共有することが重要だと感じた。

さらに、今回の発表を踏まえ、日本の課題点、ヨーロッパ諸国から学ばないといけない点があることを認識した。第一に、すべてのコースが言及していたと思うが、日本の各分野の活動に戦略がないこと。第二に、支援体制の仕組みはあるが、有効的に活用しきれていないという点。これらは、3か国の成功事例を参考にして日本の各組織で改善していきたい。

日本だけでなく3か国において共通な課題があることも理解した。それは、現存する政策で網羅することができない、政策のはざまに置いていかれる人たちをどのように支援していくか、ということである。残念ながら、既存の政策では支援対象から漏れてしまう人たちがどうしても生まれる。このときこそ、NPO団体が地域の中でイニシアティブを発揮して支援をすることが求められるのではないかと。

これらが、今回皆さんの発表から学んだことであり、皆さんも学んだことをそれぞれの国に帰られてから有効活用してくださることを願っている。

## I. フィンランド

障害者関連分野において、障害の概念への質疑があった。国連の「障害者の権利に関する条約」(UNCRPD)によると、障害者は「長期的な身体的、精神的、知的又は感覚的な障害を有する者であって、様々な障壁との相互作用により他の者と平等に社会に完全かつ効果的に参加することを妨げられることのあるものを含む」とある。大分県では、車いす使用者の通行や利用に適したスーパーがあり、レジカウンターも通常より低くなっていた。このような配慮は障害者だけでなく子供も含めた全ての人々にも役立つはずだ。

ディスカッションでは日本に焦点を当てたが、ドイツや英国でも同様なシステムがあるだろう。また、お年寄りや若者の障害者の声をもっと聞くべきだと思う。これらの人々を支援するために、各NPO間や関係者との協働を推進すべきである。孤立や隔離ではなく、彼らの自立を支援するために、医療や社会的支援のシステムを作ろうとする更なる努力が必要だと思う。そのためには私たちが今後も情報交換と成功事例を紹介しあうことが重要だと思う。



## II. ドイツ

ドイツ団のディスカッション結果を以下のようにまとめた。

まず、ロールモデルを持つこと、才能を持った人々をいかにためにポジティブな精神を持つことの重要性を感じた。これらを支援するためには、NPO専門家の育成、地方や地域レベルでのNPOネットワークの形成が必須となる。

次に重要なことは、異なった人々との協働である。政府のサポートや企業の協力も含まれる。更なる協働を促すためにキャンペーンを行い、なぜNPOが協力しあうべきなのか、ボランティアすることがどのように有益なのかを発信することも重要だと思う。その一助になりう

る案として、資格・証明制度を発展させることである。資格や修了を示す証書を発行することによって、年齢を問わず人々の活動への参加意欲を向上させ、スキルの向上にもつながる。経験知の共有も若者を支援する各NPOにとって必要不可欠なリソースである。

また、私たち皆、異なる国々の文化や習慣を理解することが必要である。特に女性の重要性は各国で認められている。性別にかかわらず各個人の重要性を尊重した宣言書を作成できたことは自負できる。更に多くの人々に署名をもらいたい。人々を励まし、活力を与える機会を提供することは重要だと思う。

最後にロビー活動の重要性を挙げる。ボトムアップ形式への変革のために陳情運動は重要である。私たち、各NPOと私たちは、共生社会を作っていく過程において中心的な役割を果たしていくだろう。



## III. 英国

このプログラムを通して、日本、賢明ですばらしい英国団員、そしてフィンランドとドイツからの情熱的な同僚について知り合う貴重な機会が与えられた。プログラム運営はとても素晴らしく、始終良い扱いを受けた。全ての行程が滞りなく運んだのも、東京や地方プログラムのボランティア等、私たちに素晴らしい体験を提供しようと精力的に働いてくださった多くの関係者によるサポートがあったからである。

主に三つの学びがあった。1) 文化交流の機会、2) 個人及び職業人として成長する機会、3) 異なる分野のNPOについて各自の知識や学びを紹介しあう機会に恵まれた。当初は自己啓発の機会になるとは思っていなかったが、プログラムを通して私たち全員が成長することができた。特に発言力、人前で話すこと、忍耐、プロジェクトマネジメント、他者への理解、コミュニケーション、裏方で支える方への感謝、異なる文化や意見への寛容の面で成長できた。プログラムは盛りだくさんで大変だったが、私たちは協力して乗り越えることができた。また、

他国の熱心さにとても感化され、ドイツ、フィンランド、日本の同僚から多くの事を学んだ。この国際的なネットワークを持続させ、各国間の架け橋となり、強固に繋がっていききたい。

プログラムは素晴らしく構成されていたが、建設的な提案として、個人内での振り返り時間がもう少しあると良い。また、日本参加青年とのインフォーマルなコミュニケーションの場があると友情を深めることができるだろう。しかし、多くの人々と交わることができて、感謝している。

今後、英国での本プログラムの広報、日本からの派遣団の受け入れ等に取り組んでいきたいと思う。同窓会

ネットワークの強化、今後の英国団員の勧誘、自分の経験の伝授を行っていききたい。



## 団長レポート

以下は、非営利団体に関する学びや日本の非営利セクター及び各分野における提言について、各分野の代表者の学びをまとめた報告である。

### 1. 高齢者関連活動

ジョー・ウォルフ  
英国団団長

はじめに、本年度地域コアリーダープログラムに参加する機会を得たことに感謝したい。都市センターで開催されたオリエンテーションに始まり、NPOマネジメントフォーラム、変化に富みかつ没入型であった地方プログラムは、かけがえのない素晴らしい経験となった。内閣府および一般財団法人青少年交流推進センターの関係者には特に感謝したい。

参加者は全員、新たな学びと専門性に加えグローバルなネットワークを携えてそれぞれのNPOに戻る。心をとらえてやまない思い出や熱い友情が色褪せないことを願う。

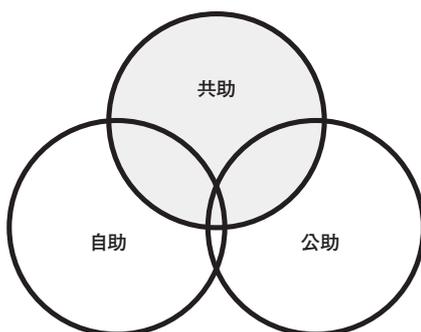
2週間強に及ぶプログラムで日本に滞在し、私は幾つかの分野で特に大きな学びを得た。

#### 地域社会参画と異なる課題解決へのアプローチ

一言に生活と言ってもいくつかの側面があることを再認識した。

- ・ プライベート
- ・ 地域
- ・ 行政

公共医療サービスの充実がより求められるプレッシャーの下、日本では相互支援がより必要になっている。今回、支援活動を監督サポートし、地域で生活する高齢者の一人暮らし世帯を訪問しボランティア支援をするケア協議会について学んだ。ボランティアは電球交換など



の支援もする。鳥取県は、相互支援の促進のためケア協議会を県内全域に推進しようとしている。

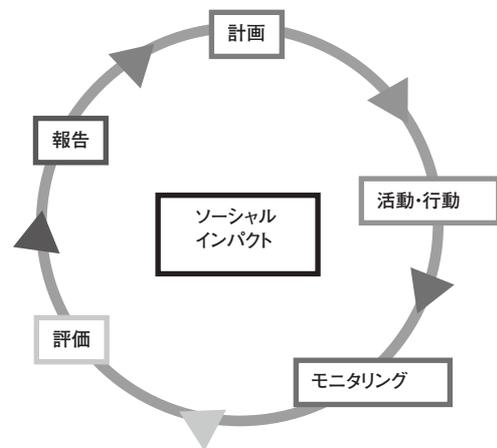
例えば、米子広域シルバー人材センターでは、退職者向けに短期やパートのシンプルな仕事の機会を提供している。60歳以上の人は年間3,000円の会費を支払って会員になると、センターから仕事のオファーがもらえる。センターは会員と仕事のマッチングサービスも提供する。

共同体意識が強い地域では相互支援は有効に機能しているが、都市部で類似した組織が機能する可能性については不明だ。

#### NPO団体および活動のマネジメントに関する学び

この分野においては、NPOマネジメントフォーラムにおいて、トピック3で成果評価に着目した。共生社会に向けた社会的インパクトを与えるための測定および評価モデルを考えた。これは、適切な変革を促すために私たちは果たして影響を与えられているかどうかを検証することにも役立つ。

モデルを下記に記し、プロセス段階毎の説明を書き添えた。NPO団体が人々の生活にプラス影響を与え、地域をまとめ、NPO活動の質向上、資金調達を透明化を図るという点から、このモデルは非常に重要である。



#### 計画

- ・ 外的環境
- ・ 相談サービス利用者
- ・ 目的の明確化

- ・ キーパフォーマンス指標
- ・ 計測手法

## 活動

- ・ 個人
- ・ 例：介護福祉士
- ・ 地域
- ・ 例：意識向上
- ・ 自分たち
- ・ 例：研修

## モニタリング

- ・ データ収集
- ・ 定性
- ・ 定量
- ・ 客観性
- ・ 継続したモニタリング
- ・ 到達目標

## 評価

- ・ データ分析
- ・ 活動前と後の比較
- ・ 何が我々が与えた社会的影響だったか
- ・ 何が上手く行って、何がそうでなかったか、それはなぜか。
- ・ どのように改善したらよいか
- ・ 客観性

## 報告

- ・ 様々な読み手に合わせた報告
- ・ 内部向け報告
- ・ スタッフ - 例：ニュースレターに事例を掲載
- ・ 役員 - 例：予算計画
- ・ 外部向け報告
- ・ 行政 - 例：会計報告
- ・ サービス利用者 - 例：事例、ストーリー
- ・ 地域 - 例：展示会、フェア
- ・ 潜在的献金者 - 例：ビデオ

## 高齢者関連活動に関する学び

私は鳥取県を訪れ、日本が直面している超高齢化社会、特にご当地では特に進んでいる現状について学んだ。日本人の4人に1人は65歳以上であり、世界で最も高齢化が進んでいると言えるほか、数字は右肩上がりが続けることが予想されている。認知症人口の増加など、医療福祉サービスを必要とする人が増えているということである。家庭環境も変わってきている。大人になった子供や孫と暮らす高齢者の比率が減り、以前と比較すると多くの高齢者が一人暮らしをする傾向がある。日本政府は

2000年に長期介護保険制度を導入し、基本費用の9割を国が負担してくれる。

鳥取県の総人口の3割が65歳以上で占められている。多くの若者は都市部で大学生活を送りそのまま都市部で就職する。ほとんどの鳥取県在住の高齢者は健常であるが、その2割は要介護と認定されている。高齢化傾向で見ると、鳥取県は国の平均を10年ほど早く体現している。鳥取県の高齢者人口比率は2025年には33%となりピークを迎えると言われている。

多くの人は高齢者に対して前向き姿勢と敬意を持っていると言っていた。高齢者の自立性と独立性がたびたび強調された。

仕事への新しい関わり方を知り、興味を覚えた。シルバー人材センターというモデルは我が国には存在しない。高齢者が興味を持っている仕事をパートで請け負うと同時に社会的なつながりも構築できる、良い手段だと思った。

ひと主体のケアは重要なコンセプトであり、ケア決定に対して家族もかかわっているというのが喜ばしかった。当事者の希望や最善の選択に対する家族の理解が無いのは悲劇である、という意見には皆同感だった。

我々は、老後も快活に過ごす支援をする優れたプログラムを視察することが出来た。医療法人・社会福祉法人である真誠会では、転倒予防教室に参加した。また、卓球をしている高齢者や95歳で定期的にダンスを楽しむ女性にも会った。この女性は18歳の時にダンスを始め、現役時代にダンスから遠のいたものの、真誠会で再び始めたのだという。

## プログラムで培った学びの活用

私たちはプログラム中、日本、ドイツ、フィンランド、UKで展開されている活動に対して新たな提案をする幸運に恵まれた。

## 情報と支援

- ・ 意識啓発：全関係組織と社会全体において、特定事項に対する意識向上の必要性について話し合った。これらの事柄に対応するため、私たちの情報提供手法の改善も必要である。
- ・ タブー：タブーに取り組むと同時に、普通にディスカッションをすることを阻む障害を除く試みが必要だ。それは、たとえ不快な内容であっても、必要に応じてディスカッションをする姿勢を育むことだ。個人的に私は癌分野に非常に興味があり、同様にグループの中には死や死を迎えることについて興味を持っている人もいたが、日本ではタブー視されているため容易にこれらの点に触れることは出来なかった。私たちは、どの国にも存在する死を迎える人を囲むこれらのタブーを取り払い、人生の最期を迎える人がどんな最期を望んで

いるのか家族にきちんと知ってもらう必要がある。関連専門家に最期の様々な選択について情報提供するために、「コーディネート・マイ・ケア」の様なオンラインプログラムの活用が考えられる。

- ・ コミュニケーション・ 渉外：資金調達について活発な議論もされた。日本文化は欧州のものとは異なるが、欧州の資金調達手法は日本でも活用出来るかも知れない。欧州諸国で実施されているPR活動や資金調達戦略について話し合い、成功事例を共有出来たことは意義深い。
- ・ 高齢求職者支援：現役時代の技術やスキルを活かせる、使い勝手のいいパートの仕事を提供するエージェントや組織の設立について話し合った。
- ・ 家族構成の変化への適応：精神的支援に、より力を入れる必要がある。相互活動のためのピアサポートを増やすとともに、必要に応じてピア自立支援グループも増やす。在宅ケアへの支援と家族の介護による精神的緊張から解放すること。

#### 相互支援のインパクト増強

- ・ 適切な技術とデジタル媒体：介護と看護にもっと技術を利用する。(痴呆症患者対応にGPSシステムを活用する、ロボットを導入する、等)

- ・ 啓発活動にソーシャルメディアの利用：既述の渉外分野とリンクさせる。
- ・ 測定と評価：評価プログラムの定期化、効果が見られるところと改善が必要な事項の洗い出し。

#### 協力とネットワーク

- 4か国の様々なステークホルダーや団体間で、協力体制を構築しネットワークの改善を図ることが出来ると思う。英国団团长として、英国の全国非営利団体協議会(NCVO)と協力し、本事業参加経験者間のリンクを改善し、今後も価値ある活動を継続したい。
- ・ ネットワーク業務担当：国レベル、県レベル、市町村レベルでネットワーク業務担当を設け、専門家、ボランティアやNPO分野の様々な当事者をつなげる。
- ・ ネットワークの発展：ネットワーク形成努力を育む。地域が困っているなら補佐し、さらに国際交流支援を提供する。
- ・ ボランティアの認識：全ての市民が幼いころからボランティア感覚を培うようにする。必要に応じて、学校や企業へ働きかける。(企業の社会的責任)
- ・ 同窓会ネットワーク：今後のプロジェクトや新たな発案のために、例えばSNSなどを利用して、国際同窓会ネットワークを活用する。

## 2. 障害者関連活動

ヘンリック・グスタフソン  
フィンランド団团长

本事業は非常に良く構成されており、開会式や記念品交換、各種スピーチ、そして各国(ドイツ、日本、英国、フィンランド)の参加青年たちとの実りあるディスカッションなど、様々なイベントも入念に準備されていた。これら4か国においてNPOがどのような役割を果たしているか、また、NPOマネージメントフォーラムからどう知識を得、自らの地域社会へとどう確実に持ち帰るか、など多くのことをお互いに学んだと感じている。

#### 非営利団体のマネジメントについて学んだこと

私は日本参加青年に対して、自分が所属する団体のことや、またその団体がフィンランド国内において、社会的にどのような影響を与えているのかなどを伝えた。日本参加青年からは、いくつかの重要な質問を得た。それは、私が所属するNPOがどのようにメンバーを擁護し、また日々の活動の中でどのように彼らの人権を守っているのか、さらに、身体障害者の個々のニーズに対しどのように社会サービスを提供しているのか、ということだった。NPOマネージメントフォーラムにおいて、私は、

「女性管理職育成による非営利団体の活動の充実」というテーマのトピック2に参加した。私の所属団体であるフィンランド身体障害者協会(FPD)の例から、私たちの団体において組織的に作り出された平等に関するアクションプランの視点と、私たちの事務所に存在する複数の女性マネージャーについての事例を紹介した。現在、私たちの事務所では多くの女性マネージャーが働いている。そのため、このトピックに参加することにも抵抗がなかったし、また、我々が2月19日に行ったディスカッションの中で作り上げた「非営利団体女性リーダーシップ憲章2017」に自分の名前を署名することにも抵抗がなかった。この憲章は、NPOにおける女性のリーダーシップを増加させるべく、今後我々が地域社会活動の中で取り組んでいこうと約束するものである。

#### 障害者関連活動について学んだこと

施設訪問を通して、障害児童関連施設を訪問し多くの学びを得た。社会福祉法人とんでは、女性管理職やスタッフが、障害を持っている児童とそうでない児童に対して意見が言えるようになるための支援をしている様子を垣間見た。基本的な演習を通して、何を食べたいのか、一緒に遊ぶためにはどうしたらよいのかなど、自分の意思を確認することを教えていた。社会の一員になる

ため、日々の活動の中で児童たちを応援しているのだ。

当事者の家族や看護スタッフには、フィンランドのネウボラ・システムや児童医療保険ユニット、さらに十代の若者に対する医療診断結果を加味して家族の個別ニーズに寄り添った社会サービス支援などについて紹介した。また、日本やフィンランドで効力を持つ国連障害者権利条約（UNCRPD）や司法関係書類を有効に活用することを話した。日々の活動を通して、身体障害を持つ方々の自制心確立を応援し意思決定を支援するために必要であると思う。

保育園兼こども発達支援センターであるとんとんへの視察訪問が、大分県内の地方ニュースで取り上げられた。障害者グループからインタビューを受けた参加青年もいる。地方セミナーのフィンランド紹介でネウボラをはじめフィンランドの支援制度について触れている場面、そして障害の正しい情報と国連障害者権利条約で提唱されている障害者の人権に関する啓蒙活動についてもニュースの一部となった。

放課後等デイサービスなないろでは、自閉症やアスペルガー症候群の児童への支援サービスを提供していた。私の所属団体ではないサービスだったため、これらの障害を抱える子どもたちの育児支援という意味で新たな学びがあった。私たちの団体では環境適応研修を開催するほか、当事者の家族全員に対して奇病ユニットが事実に基づいた疾病の説明をしている。また、共通する課題も見つかった。日本とフィンランドで、どうしたら出来るだけ早い段階で子どもたちが正しい診断を受け両親に受け入れてもらえるか、ということである。

### 本プログラムをどのように活かしていくか

弁護士として、私は日本の社会医療制度について興味があった。そして、日本では障害によって個別の認定システムがあることを知った。身体障害、知的障害、医療サービス、発達障害などであり、社会医療サービスを受

けるために認証が必要だということだ。学童の要素とデイケアセンターの要素を合わせ持つなないろでは、障害者証がなくても障害を持つ児童が支援サービスを受けられることを知って良かった。様々な理由により、自閉症やアスペルガー症候群の診断を受けるのは容易でないからであり、私も同感だ。

補助器具についても興味があったが、日本の制度について学んだ。納税者であれば、上限37,200円の補助器具負担がある。県行政及び地方自治体は当事者の家族に対して、経済的に困難であれば、補助器具負担額の全額を助成することがある。それでも障害を持つ児童側には課題がある。それは当該児童の成長にともない、5年毎に器具の再検討が必要になるということだ。例えば、3年後には同じ児童が同じ車椅子は使えない、ということがある。また日本では、社会医療サービスは当該障害児童の課題に基づくものであることも学んだ。

日本の参加青年は、地域とのつながりを持つために非常に努力していると感じた。というのは、日本のリーダー参加青年には本事業の経験があり、プログラム期間中はリーダーとしてたくさん働いていたということだ。ワークショップでもディスカッションをリードし、トピックのまとめを行った。私がフィンランド団団長であったためリーダーシップを取戻し、プロジェクトの調整をした。大分県で経験したホームステイは非常に印象深く、沢山の学びがあった。温泉に行き、別府の湯気を見ることも出来た。熊本県にまで足を伸ばした。1年前に震災の被害にあったところで、残念ながらまだ倒壊した家屋が見られた。震災にあったらどうすれば良いのか、今なら私も分かる。

英国やドイツ、フィンランドの3か国からの参加青年とのネットワークも構築出来た。今後、そのネットワークを大切に、私の仕事でも新たなアプローチを導入して行きたい。

## 3. 青少年関連活動

エレン・ヘルツォーク  
ドイツ団団長

はじめに、内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センターと本年度地域コアリーダープログラムの関係者の皆様に、特にも次の点で感謝したい。

- ・ 熱意と愛情を持って、プログラムをうまく構成し公式性を保ちながら企画運営した事。
- ・ 日本の政治、文化、人口構造の変化や人々の認識の変化に起因する様々な課題を含め、日本について多くを学ぶ機会を頂いた事。

- ・ 個人的に、ドイツ団団長並びに青少年グループのリーダーとしてプログラムに参加するという貴重な機会と栄を頂いた事。
- ・ この交流を、私自身だけでなくおそらく参加青年全員にとって、一生に一度の忘れがたい経験にして頂いた事。

NPOマネジメント、NPOの発展、日本の市民参画分野、様々な青年グループから学んだことをまとめると、次の結論に達する。

若者の地域参画の現状は、様々な形で地域に影響を及ぼしている。ここに幾つか挙げるが、それは青少年分野

とNPO活動にも影響を及ぼすものである。

- ・ およそ10人に1人の15歳から39歳の若者は無職である。
- ・ 長期にわたり無職である若者の割合が増加している。
- ・ データ上では38.4%に上る若者が希望を持っていない。
- ・ 社会では未だに、終身雇用制が「普通」とであるという考えが一般的である。
- ・ 若者のグループにおいては、投票行動はよくないとされている。

若者が希望を持つこと、社会や地域にとって大切な存在であると感じること、改善の一端を担えると感じること、自らの未来は自分次第で変えられると感じること等は、若者の社会参画をより促進するうえで大切な要素だと考える。日本の教育システムでは、ボランティア及びNPO活動に触れる機会が非常に限られていると聞いた。その場合、ボランティアの手本となる人物に出会う機会も限られてしまう。社会的能力、公共の場で意見を述べることや、時間管理、意思決定能力等の向上に寄与する大切な経験を積む場として、学校が市民活動をもっと支援することは出来ないだろうか。これらはすべて「若者の育成」に寄与し、それぞれの地域で市民参画を促進することにつながる。また、就職不安を抱えているからこそ、多くの日本人は結婚せず子供を持たない、よって人口は減るのだと言わざるを得ない。

認定特定非営利活動法人育て上げネットは、若者が自分自身でいられ、地域にとって大切な存在となるために様々な方法を模索し、職業訓練を受け、友達と出会い、他の人との会話を持つ練習をする場である。このNPOにとり重要なのは、どんな能力も大切な能力であり、若者は宝であるということだった。私たちは、金銭を持たない若者を支援すること、彼らの手がNPOの支援に届くようにする重要性について話し合った。例えば、育て上げネットに来るためには地下鉄やバスを利用しなければならず、お金が必要になるからだ。私たちは、スタッフやボランティアの素晴らしい活動に感動した。

NPOは、地域行政や地域社会からより組織だった支援を受けるべきだと感じた。NPOが協力し合って、意見や課題、新たなアイデアについて話し合い、共通の目標を発展させることが出来る場となるよう、地域でさらにネットワークを広げる必要性を感じる。人権を意識した配慮は、障害者や高齢者、青少年、女性など、すべての人にとって必要である。WEL's 新木場の発表で、支援を要する人や障害者が受ける、就労支援、職場訓練、ジョブコーチング、職業訓練等様々な支援プログラムについて学んだ。日本では、障害者が職場で個人的な支援を得られるシステムや支援を得るための資金的援助が無いことを知って、非常に驚いた。WEL's 新木場の支援対象

者の80%がパート働きだった。このパートという立場が、希望を持ってない、結婚しない、子供を持たないことの大きな原因の一つであることを学んだ。一方、現状を変えるために様々な模索をし、企業と協力する余地はまだあると感じた。

NPOマネジメントフォーラムでは、NPO活動の資金繰りや活動の専門性を高めることや活動の可視化について活発に話し合った。NPOマネジメントの側面では、立ち上げや地域行政の支援を得ることが容易でないこと、NPOの専門家はボランティアの認識向上に手こずることなどについて説明があった。組織の専門化や自主活動の充実を図るとともに、活動の質を概観できるようになることなども大きな課題である。東日本大震災以後、NPO活動が増加し多くの人が地域で何らかの活動をしたいと思っている。それぞれの人が活躍できる市民活動があると思う。シルバーの様に高齢者対象の活動をするグループがあれば、他のグループは障害を持った若者と引きこもりを対象とする、あるいは若者一般を対象とする、他のグループが障害者を対象とする、という具合にである。地域には実に多様な人々がいて様々なニーズがあるが、それら全てに対応するという視点が私には無かった。NPOという組織の中では、全ての人が活動を共に出来る。必要なのは、地域行政内にNPO支援センターを設け、アイデアやNPOを見出す力がある人がNPOマネジメントや資金調達、PR等様々な側面でナレッジ支援を提供することかも知れない。NPO間には上も下もない。従って、コミュニケーションをとるのも容易で、より多くの人を巻き込む可能性がある。非常に好ましいことだと思う。NPO活動にとって受け入れるということは非常に重要な姿勢である。このような考え方を持つと、若者の希望を支援し、全員が社会にとって大切な存在であるという共生社会へ向けた若者の力を元気付けることが可能になる。社会の中でNPOは重要な役割を担っている。私はボランティアスタッフと一緒に、ボランティアの仕事についてディスカッションをした。スタッフにとっても刺激を受けた他、地域をよりよくするために何かしたいという強い意志を感じた。質の高い活動にはNPOラベルを発行する、というのも良いかも知れない。地域で展開されている優れたNPO活動の可視化にも役立つかも知れない。

統計によると、高齢者が増加することに伴い若者の重要性が増している。ドイツでも状況は同じで、若者はプレッシャーを感じている。日本では、38%以上もの若者が希望を持っていない状況で、個人として職業を持ち自分の意見を述べることを望んでいない若者が多い。教育システムは全員を同じようにすることに重きを置いている。独特の存在であり、異なる意見を述べることは良しとされず、若者はとても保護されていると聞いた。それ

は大学生になっても変わらない。私にとっては若者に対する新たな視点だったため、その考え方を理解しようと試みた。日本でも大人になると、自分で意思決定をし、良い決断が出来ることや、創造的で、自信を持つことが望まれる。しかし、私は、日本の若者が人格の成長や、間違いから学ぶ機会を持っていないように感じた。ドイツでは、子供や若者は間違っただけで、その過ちから何かを学ぶ権利が認められている。自分が自分であるために、そして主流とは異なる各自のアイデアを発展させるために、非常に大切なことだと思う。いいアイデアを発展させ共生社会の実現のためにどうしたらよいかを考え、模範的な人物モデルを見つけるために、若者たちは競ってNPOを探す。若者を力づけ勇気づけるために、日本でも機能する方法ではないだろうか。日本の若者は投票しない、とも聞いた。若者が地域により影響力を持つよう、若者のネットワーク増強に向けて、地域行政が動くべきではないかと思う。若者の代弁をするのではなく、若者に意思決定プロセスや結果を体験させるのだ。鹿児島県では、より良い社会のためにアイデアを持った沢山の刺激的な人、女性、若者に会った。NPO活動の質や活動がもたらす影響を理解出来れば、活動について議論が出来るようになる、そうなるようにモニタリングや評価に加わってもらいたいと思う。響のようなNPOと伝統的なNPOである艸舎、鹿児島大学は、団体や個人が若者支援に対して同等になれる円卓、話し合いの場を設けるべきだ。関係者全員が1枚のパズルの一部分を担っていて、若者とつながる活動を成功に導く必要な存在なのである。鹿児島県行政は、そのようなネットワークや円卓を支援できると同時に、そうすることは市の若者の行動に大きな影響を与えると思う。若者が、声を聴いてもらえる、存在を認識してもらえる、歓迎されると感じるならば、若者はきっと地域に残ることを希望するはずだ。

今回、このような貴重なプログラムを経験するとともに、ドイツ団団長として4か国が参加している多国籍グループでリーダーシップをとるという初めての役割を与えてもらったことで、私自身のスキルアップにもつなが

る機会を得たことに、心から感謝したい。ドイツ団団長として、青少年グループのリーダーとして、数々の公式スピーチを担当したことはかけがえのない経験だった。青少年グループは、持っているものを出し合うワーキングユニットとなったが、その青少年グループを支援することは、素晴らしいプロセスだったし本当に充実した経験だった。

私はきっと、資金調達や企業とのネットワーク構築などの知識を提供しながら、若者やNPOと活動するために再度来日すると思う。私が所属するアルバイター・キントという非営利団体では、いかにネットワークを構築し、ボランティアのための資金を調達するか、ウェビナー・プログラムというプログラムを開発中である。様々なボランティアグループやスタッフと協力して作りあげ、団体の包括的な発展を実現するためのシンクタンクとしてスタートさせる予定だ。

この度、多文化グループで活動するという視点で多くを学んだ。コミュニケーションの取り方、初期の段階で何について話しているのか、や、用語の定義を明確にすることなどだ。NPOフォーラムで絵やスケッチを使ってコミュニケーションを図ったことは、自らのファシリテーションスキルの向上につながった。目的や結果のみならず、学びのプロセスが感じられた。

今後も、インクルージョンや多様性に取り組む活動を継続していきたい。所属団体ではセクションを超えた風通しの良さをテーマに取り組んでいきたい。全てのNPOにとって大切な要素であると思う。

さらに、企業とのネットワークを利用した活動や共に考える機会、企業の人事部との連携をさらに後押ししたい。企業の人事担当に、若者の人格形成や共生社会の実現のためにボランティア活動がいかに大切であるかを理解して頂けることを切に願う。

どうも有難うございました。